

八久保さんを悼む

—フィールドワークの思い出—

浜田 弘明

二〇一二年度の新学期が始まって間もない頃、八久保さんの訃報を聞き、我が耳を疑った。八久保さんは、私と同じ年のまだ五四歳であり、あまりにも早すぎるご逝去であったからである。

八久保さんとの出会いは、今からちょうど三〇年前に遡る。誕生日も近く、血液型も同じO型で、同じ地理学を専攻し、似た者同士の仲であった。最初にお目にかかったのは、一九八二年に開かれた法政大学人類学研究会（通称、人類研）の例会の席であったと記憶している。当時、私は法政大学の地理学科卒業後、相模原市の博物館準備係に学芸員として勤務し、八久保さんは、国士館大学の地理学科を卒業後、法政大学大学院の地理学専攻に在籍されていた。

その後も、人類研でしばしばお目にかかり、ことに例会後の飲み会の席で親交を深めさせてもらった。当時から、八久保さんが酒好きだということは自他ともに認めるところであったが、その酒について地理学的研究をされているとの話を聞き、とても個人的関心を惹かれた。当時私は、石仏について地理学的研究を進めていたため、お互いに変わったテーマで地理学研究をしているものだと言い合ったことを記憶している。冗談なが

ら八久保さんはよく、趣味と研究を兼ねて酒を飲んでいるのだと話されていた。

一九八四年になって、社会人として私も法政大学大学院の地理学専攻に進み、八久保さんの後輩となり、その後、共同調査や共同研究を何度となく行うこととなった。最初は、八四年夏から始まった、人類研の第三次檜原村合同調査であった。檜原村は、東京都西多摩郡にある都内唯一の村で、伝統的民俗行事や文化財がまだ色濃く残る時期で、八久保さんは酒造や地場産業、私は石仏や水車についての調査を行った。

翌八五年からは、法政大学卒業生を中心メンバーとして「外濠会訪中団」を組織し、以後三年間にわたり、中国各地を巡った。第一回目の訪中は、外国人に開放された直後の海南島であった。海南島は、南シナ海に面していて中国最南端に位置し、今日ではリゾート地として知られる島である。しかし当時は、まだ十分な宿泊施設も無く、招待所と呼ばれる施設に泊まったものの、赤錆びた水のシャワーしか出なかったことが記憶に残る。海南島で墓地や石造物の調査を行った際、八久保さんにもメジャーを持ってもらうなど、大変協力して頂いたことを思い出す。この時の結果は、「海南島を訪ねて」として月刊『地理』三一巻三号に掲載しているが、巻頭のカラー写真には、墓の前で八久保さんがメジャーを持って計測している姿が残っている。当時、中国の都市部以外では、まだ冷蔵庫がほとんど普及していなかったため、ビールと言えば常温ビールであったが、海南島では昼から水代わりに口にしたと記憶している。

八六年の第二回目訪中では、福建省の山岳地域の少数民族などを訪ねたが、この時、八久保さんの参加は無く、次にご一緒した訪中は、八七年の内モンゴル自治区の訪問であった。当然のことながら、この訪問先も整備された宿泊施設は無く、草原地帯の一般のゲル（パオ）に宿泊させてもらった。歓迎会の席では、大変アル

コール度数の高い馬乳酒が振る舞われ、私は一口で参ってしまったのだが、八久保さんの平然と飲んでいる姿を見て、改めて酒豪であることを思い知らされた感じがした。また、晴天の夜、どこが天の川なのか分からないほどの満天の星の下で、日本から持って行った日本酒バックをととても美味しそうに飲んでいた八久保さんの姿も忘れることが出来ない。

さらに、八八年から始まった神奈川県座間市民俗調査では、人類研の主要メンバーに参画を願い、ここで八久保さんには、食生活と戦後生活の変化について担当して頂いた。調査は五年にわたったが、当時、茨城県取手市にお住まいで、座間まで通うのは、さぞかし大変であつたろうと推測する。そのようなハンデものともせず、熱心に調査して下さい、予定通り九三年に『座間市史 民俗編』を刊行することができた。

ここまでの一〇年間、八久保さんとは間断なくフィールドワークをともにし、親交を深めさせて頂いた。その間に、私が一足先に結婚し、結婚式にはもちろん八久保さんにもご出席いただいた。間もなくして、八久保さんも和子さんと結婚され、今度は私がつくば市の結婚式場へと向った。

その後、二〇〇二年に八久保さんは神奈川県に就職され、同年、私は桜美林大学に転職した。その二年後の〇四年、福田アジオ先生から、神奈川県がCOEに採択され非文字資料の研究を進めるので、協力してもらえないかとお声をかけて頂き、以後、私は非常勤のCOE教員として神奈川県にお世話になることとなった。八久保さんもCOE研究員としてすでに参画されていて、私は八久保さんとともに、香月洋一郎先生をリーダーとする「環境と景観の資料化と体系化」班に所属することとなり、「景観の時系列的研究」をテーマに研究を進めることとなった。

この研究の中で、戦前に撮影された「澁澤フィルム」の現地比定を八久保さんと共同で行い、〇四年と〇五年の二回にわたり韓国へと渡った。このころは、すでにお酒を節制されており、韓国でもあまり飲酒はされなかった。この時の、蔚山（ウルサン）での景観調査結果については、「写真資料と景観変容―澁澤フィルム分析に向けての―」のタイトルで、COE調査研究資料1『環境と景観の資料課と体系化に向けて』に、八久保さんと共著で掲載させてもらったが、結局これが、最後の共同調査となってしまった。

足かけ三〇年にわたり、フィールドワークを共にさせてもらった八久保さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。